

不登校からの受験

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年3月5日

娘が、希望の都立高校に合格した。実は中学受験をし、自分で選んだ大学付属校に入ったが、あわなかった。1年1学期の半ばから休みが始まり、2年の2学期から完全に不登校となった。

前の夜は学校に行く、というのだが、翌日になると昼すぎまで起きられない状態が続いた。めまいや頭痛もひどかった。こう書くとひ弱な子を想像するが、小さい時から男の子と一緒に野球をやり、ピッチャーをしていた活発な子である。

この間私も、悩む親が普通にやるであろうことをやった。朝、強引に起こして学校へ連れて行こうとする、なぜ学校へ行かないのかと責める、ついでに自分も責める、不登校関連本を読みあさる、担任やカウンセラーと相談する、友だちに電話して泣く……。

「起立性調節障害」とも診断された。背の伸びに対し自律神経の成長が追いつかず、起きた時に急激な低血圧を引き起こす、という。専門医に、何と7種類の薬を処方された。

また、やっと2ヶ月後に予約がとれた思春期外来に行くと、原因は全て母親である私の“高圧的な”態度にある、ときめつけられた。

娘も私も精神的におかしくなり、共倒れになりそうな時、見かねた親しい友人が、娘を預かってくれた。それまで余裕がなかったのが、離れてやっと落ち着いて考えられるようになったらしい。転校して都立高校を受験し直すと、自分で決断した。

2年の3学期から地元の公立中学に戻ったが、すぐには行けなかった。その時に、毎日帰りに寄ってくれた新担任。毎朝、迎えにきてくれて、今も一緒に行く小学校時代からの友人。自主的に勉強する面白さを叩き込んでくれた個人塾の指導者。本当にいろいろな方にお世話になった。